

救済の多様性 天理教 ②

天理大学国際学部教授
山田 政信 Masanobu Yamada

經典的カトリシズムからの入信事例をもう一つ考察しよう。

50代後半の男性アジウソンの妻は顎がすぐに外れることに悩んでいたところ、1984年に天理教を知り入信した。教えを伝えたのは隣人だった。しかし、その人は信仰しているわけではなかった。妻の入信後、アジウソン自身も膀胱を煩っていたことから入信。そして妻よりも先におぢばがえりをして、ようぼくになった。入信後、二人とも体の調子が良くなった。夫婦には一人娘がおり、1994年から1年間天理市にある天理教語学院で日本語を学んだ。その後、ノルデステ芳洋教会が運営していた幼稚園で保母として働いた。

アジウソンの妻は、入信当初なぜ天理教ではイエスについて話さないのか不思議に思っていた。しかし、サンパウロ州パウルー市にあるブラジル伝道庁の修養会で学んだ際、イエスの仕事は終わり、天理教教祖がイエスに代わって世界を助けるために働くようになったのだと理解するようになった。それゆえお願いごとがあれば、イエスではなくオヤサマ(教祖)にしなければならぬと考えるようになった。なお、レシーフェ市からパウルー市までは2,700キロ離れている。現在ではサンパウロまで飛行機に乗ることがあたりまえになったが、当時は二日間かけてバスで移動した。

天理教に入信した頃のアジウソンはカトリック教会から足が遠のいていた。というのも、彼は時代が変化してカトリック教会が適合的でなくなり、それに代わる「新しく深い教え」が必要ではないかと考えるようになっていたからだという。

ノルデステ芳洋教会があるレシーフェ市は、1970年代から80年代にかけてカトリック教会内で盛んだった解放の神学の実践を教育の側面で支えたパウロ・フレイレが生まれたところで、ブラジルのなかでも社会格差が顕著にみられることから活動拠点として重要な場所だった。解放の神学は貧困層の人々の社会的および政治的疎外からの解放という「救済」を目指した。軍政によって抑圧された人々に救済の手を差し伸べて大きな成果を上げたと評価されるが、1985年の民政移管以降、特に1990年代に入ってから活動が低調になった。

レシーフェ市内で、解放の神学の実践の場である生活基礎共同体は辺鄙なところに追いやられたかのようにして点在する。そのため普段彼らの試みが都市部で実感されることはない。また、90年代から流行りだしたカリスマ刷新運動に押されて、カトリック教会内部でも存在感は薄くなっている。さらに、プロテスタント教会の隆盛も顕著である。それゆえ、カトリック教会が時代に合わなくなってきているというアジウソンの印象は都市住人にとってあながちの外れだとはいえない。

さて、そのような彼が求めていた「新しく深い教え」を天理教だと認識したのは、他ならぬ「聖書」の解釈に基づいてであった。次の聖句は彼に天理教の信憑性を与える根拠になったという。

勝利を得る者を、わたしの神の神殿の柱にしよう。彼はもう決して外へ出ることはない。わたしはそのものの上に、わたしの神の名と、わたしの神の都、すなわち神のもとからでて天から下って来る新しいエルサレムの名、そして、わたしの新しい名を書き記そう(黙示録 3:12)。

彼にとって「勝利を得る者」とは「親神」であり、「わたしの神の神殿」は「ぢば」である。そこに建てられた「柱」とは「甘露台」であり、神が「決して外へ出ることはない」のは「ぢばに神名を授け置」かれたからである。「私の神の名」、「新しいエルサレムの名」、そして「私の新しい名」とは「天理王命」である。聖書のこれらの言葉は、それまで彼がぼんやりと抱いていた「新しく深い教え」の到来を確固たる認識に変えるに十分だった。

前回で紹介したホザナの事例においてもそうであったように、經典的カトリシズムからの入信パターンは、個人が「聖書」の聖句を「預言」として読みとってカトリシズムを再解釈する過程というように理解できる。「人間の宿し込みの場所」、すなわち「ぢば」という極めて土着的な特性が、聖書にみられる普遍的な「真理」として受けとめられ、その「真理」を発動する「親神」が唯一神として理解された。

このような事例は、天理教のそれだけに限られるものではない。フォークカトリシズムの巡礼地であるボンジェズ・ダ・ラッパを論じたステイルは、新しく誕生した巡礼地が信者らにとって「新しいエルサレム」(黙示録 21; イザヤ 65:17-25、第二ペトロ 3:13)という聖なる世界として解釈されていると分析する。すなわち、新たな巡礼地の出現とは信者のアポステリオリな認識によるものであるにもかかわらず、すでに聖書に示されていたアポステリオリな事態として受け止められているというのである。こうしたことからステイルは、聖書は信者が新たな物語を正当化するための神話として機能しているとし、それによって次の新たな神話が誕生することを「フォークカトリシズムの創造」と呼んだ(Steil 1996: 34)。

このような意味において、ホザナとアジウソンの二人による「ぢば」の解釈は、「フォークカトリシズムの創造」というコンテキストで解釈できる。そのため、両者は天理教に入信した後も、カトリックを否定することなく、それまでの信仰の拠り所となっていた「聖書」に依拠しながら、自分自身の「新しい信仰」を物語ることができたのである。ホザナは、友人に「私はカトリックを捨てたのではない。たくさんの宗教があっても行き着く先は一つ。天理教へ入信したのは自分にとって辿るべき道を見つけたから」と語った。彼女は、カトリックの継続を、アジウソンはカトリックの終焉を強調した。しかし、彼らに共通するのは天理教を介した經典的カトリシズムの新しい変容であり、その変容のなかで自身の救済を体験しているという事実である。

再度、聖書に記されたイエスの言葉を引用しよう。

わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない(ヨハネ 14:4-6)。

經典的カトリシズムから天理教へ入信した人々は、キリストを通過してオヤサマと出会い、やがて神のもとに辿り着くことを信仰の目標に置いている。それが彼らにとっての「真理を求める道」なのである。

【参考文献】

Steil, Carlos Alberto. *O Sertão das Romarias*, Vozes, 1996